

呪いの望遠鏡

20250124

エリー



—

目次

01 怪談	1
02 理科準備室	3
03B と K	5
04 かきかえ	6
05 幻覚と現実	7

01 怪談

俺はギタリスト志望の高1男子。名前は高梨有紀(たかなしゆうき)。このクラスのボスだ。

最近、担任の男性体育教師がうざいので、ホームルームに仲間とだべっている。

俺の機嫌を損ねると殴られることを知っているクラスメイトも真似をする。

担任の話を書く生徒はいない。

バーン。

いきなり担任が教壇を叩いた。

俺らは一斉に動きをとめて教壇を見た。

「君たちは1年生なので知らない」

俺らの注目を集めたことを確認すると、担任は怖がらせるように低い声でゆっくり話し始めた。

「理科準備室に、呪いの望遠鏡がある。見たものに幻覚をみせる」

俺らは吹き出した。

「幻覚が見えるだけ？」

失笑する俺らに、担任がたたみかける。

「幻覚は見えてる映像をやるまで消えない。見てしまったら、すぐにやれ。今、痛いかな。あとから痛いかな。究極の選択が問われる」

キーンコーンカーンコーン。

授業が終わり、担任が片付けながら言う。

「過去には死人を出している」

教室の前扉から出ていこうとした瞬間、立ち止まり、振り返りながら言う。

「絶対に覗くな！」

身震いしながら去る担任を見て、一瞬、静寂が訪れる。

「バカバカしい」

俺は吐き捨てるように言った。

「でも何が見えるのか気になる。覗いてみたくない？」

空気の読めないKが言う。

ボスの座を狙うBが俺をけしかける。

「有紀が覗いたら俺らも覗くよ。担任を見返してやろう」

「いいぜ！」

引けなくなり俺は答えた。

02 理科準備室

2限目の体育をパスして、俺とBとKは理科準備室に向かった。
中に入るとホコリの匂いがした。
遮光カーテンが引かれた部屋は暗い。
つまづかないように、段ボールが並ぶ棚を通りすぎると、奥の机に望遠鏡があった。
「どうして出してある？」
Kがいきなり覗こうとして謝る。
「ごめん、先に覗いたらダメだよね」
先に覗けばいいのに！
こうなったら、全員逃さねえぞ。
「まあな。俺、B、Kの順で覗いて、何が見えたか、順番に言おうぜ」
Bがうなずく。Kも従う。
望遠鏡は長さが1メートルくらいある。黒光りしている。手を添えると人の肌のような感触がある。まさか、生きてる？
恐怖を感じ、飛び退きそうになる。
Bの試すような目線。
Kのキラキラと好奇心に溢れた瞳。
引けない。
右目を当てて覗くとなぜか明るかった。
トイレの個室に入る映像が見える。扉を閉めようと振り向くと、蝶番に右手の人差し指を挟むイメージが浮かぶ。
異様ではあるが、さして怖くはない。
思わず笑みを浮かべる。
続いてB、Kと覗く。
「トイレで指を挟む映像」
Bが驚きながらいう。
「ハンカチをトイレに落とすだけ」
Kがニッコリいう。
「学校のトイレでうんこ！」
俺らは顔を見合わせる。
「俺が一番痛くねえ？」
うなずくBとK。
「やるのはちょっとねえ」

俺は強がってみせた。

「映像が見えるくらいたいしたことねえからどうでもいいや」

俺らは理科室を後にして早退した。

03B と K

家に帰った俺は、幻覚のことを忘れて、トイレに入る。
便座に腰掛け、扉を開けっぱなしでうんこをする。
発作的に人差し指を蝶番に近づけていく。金属に指が触れた冷たい感覚がする。
不意に風が吹いて、扉がしまる。
慌てて扉を開けると、指は紫色に変色して、ぐにゃりと曲がっている。
俺の鼓動に合わせて、血が溢れだす。
望遠鏡を覗いたときとは比べ物にならないくらい鮮明な映像に支配され、何が現実なのか、分からなくなる。
自分の叫び声で正気に戻り、急いで尻をふく。
洗面で何度も手を洗い、傷がないことを確認する。
あまりの恐怖で、トイレに行けなくなる。
水分も食事も取らず、ひたすら部屋にこもってギターをかき鳴らす。
一睡もできず、朝がきた。
漏らす寸前に、小さい頃、風呂場で小便をしていたことを思い出す。
長い長い放尿のあと、深い眠りに落ちた。
目が覚めると、B と K がいた。
「お前ら、どうしたんだ？」
B が震えている。
「僕はトイレにハンカチを落として、そのまま流して、配水管を詰まらせ、学校を建て替える映像が見えてね……便器に落としたハンカチを素手で拾ったんだ」
K も泣きながら言う。
「僕は学校のトイレでうんこしてたら、急に扉を開けられて、ウンコマンって言いふらされる幻を見て、その通りになった」
B と K が、俺を見る。
「俺は幻覚なんか平気だ。指の方が大事」
「やるしかない」
K が俺の肩をつかみ、激しく揺さぶる。

04 かきかえ

翌日の夕方、風呂場で放尿していると、姉が帰ってきて、騒ぎだした。

「汚らしい！」

裸の俺を蹴り飛ばし、風呂場から追い出す。

「やめろ。トイレに行けない事情があるんだ！」

「知るかボケ。バケツにでもしてろ！」

俺は物置からバケツを取り出し、自分の部屋に戻った。

玄関チャイムが鳴り、担任が現れる。

バケツにたまったおしっこを見て、担任が鼻をつまむ。

「やっぱりトイレ関係か。お前も覗いたな」

「出ていけ！」

部屋の入り口に立ったまま担任が言う。

「お前には関係ない話だが、呪いの望遠鏡には続きがある。イメージを書き換えると幻覚が変わる。たとえば指を切る幻覚を、紙を切るに変えると、ダメージが軽くなることもある」

俺は思わず答えてしまった。

「本当なのか？」

「本当だ。ただし」

俺に背を向け、振り返りながら担任が言う。

「しぬほど辛くなる場合もある。あ、でもお前は覗いてないから関係ないか」

手を振り、去っていく担任の背中に、罵声を浴びせる。

「二度とくんな！」

すぐにトイレに向かい、ふたを閉めたままの便器に座り、指ではなく、紙を挟むイメージに書きかえる。

引き潮のように、さーっとイメージが消え、痛みも消える。

「よし！」

イメージが消えた俺は、普通の生活に戻る。飯を食い、炭酸ジュースを飲んで、トイレで用を足す。恥を捨ててまで守った指でギターを弾く。学校にも通い、元通りの生活を送る。

それは始まりに過ぎなかった。

05 幻覚と現実

事件から一週間経った1限目のホームルームで、漫画を読もうとした瞬間、幻覚が再び現れた。

指から紙を挟む幻覚に変えたら、紙で指を切る内容に変化している。

しかも今回は最初から4Kの体験型映画くらい迫力がある。

少しカーブした1ページの漫画本に、指を近づけていく。ナイフのようにザックリ切られて、血飛沫が飛び散る。

何度も何度も紙で指先を切付け、白い骨が見えるほどぱっくり傷口が開く。

血が止まらず、死んでいく恐怖に叫び声を上げて駆け出した。

切るのは指じゃない。

なんなんだ？

嫌いな人参にしよう！

紙で人参を切る映像を浮かべる。

これで一週間は行ける。

「それはどうかな？」

誰だ？

振り返ると購買が見えた。

その瞬間、人参を喉に詰まらせ、窒息死する映像と感覚に乗っ取られる。

行きたくないのに、どんどん引き寄せられる。そしてカレーパンを手を持つ。

「200円！」

ポケットから小銭を出して支払う。

怖くて口に出来ない。

駆けつけた担任が俺を羽交い締めにする。

Bがカレーパンを口に押し込んでくる。

暴れる俺の手をKがつかむ。

「少しの我慢だから」

幻覚なのか、現実なのか、息苦しさに恐怖を覚える。

次の瞬間、保健室で目覚める。

目の前に呪いの望遠鏡が飾ってある。

俺は目を閉じたまま走りだし、窓ガラスに衝突して頭から血を流し倒れる。

台車に荷物を積んだ配達員が通りかかり、俺の指をひきつぶす。

夢？

現実！

呪いの望遠鏡20250124

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
